

江戸文化の研究者で、法政大学総長をされた田中優子氏が『苦界・浄土・日本 石牟礼道子 もだえ神の精神』を上梓している。石牟礼氏の『苦界浄土』は日本に衝撃を与えた。彼女は水俣病者と命を分かち合い、「水俣闘争」に関り続けた。その水俣闘争の中から、幾多の素晴らしい文学作品を生み出している。そこには、江戸時代以前の豊穡な文化と、近代・現代の人間否定の文明が対比的に描かれている。江戸文化に詳しい田中氏が、石牟礼文学を読み解いた解説に、改めて、石牟礼氏の奥行きを知らされた。全体像についての説明はできないので、感銘を受けた事柄についての感想を書きたい。

田中氏は「石牟礼道子は水俣闘争における『もだえ神』であった」と言う。石牟礼氏はよく「悶えてなりとも加勢せんば」を口にする。悲嘆にくれる人を見れば、何を措いても駆けつける。駆けつけるけれども、何もできず、立ち尽くし、もだえるだけである。何の計算も見返りを求める気持ちもない。相手の気持ちに乗り移るように「瞬間的に悶える。」道徳的に「相手の気持ちになって考える」のではなく、義や徳義を意識して行動するのでもない。苦しむ者の傍らに魂が瞬間的に移動している。石牟礼氏にとって「もだえ」とは、そのような現象であると、田中氏は分析している。『苦界浄土』はルポルタージュでも、記録文学でもない。苦しむ人々の中に入り込み、本人さえ言葉にできない言葉を聞き取り、受難・受苦の物語を写し取る。「こんなことを言っていない」という者は一人もいない。確かに自分の声だと誰もが感じた。「もだえ」は、何もできず立ち尽くす徒労であるが、それゆえに、苦しむ者の魂の叫びを自分のものとしてすることができる。

石牟礼氏は田中氏との対談で下記のように語っている。「私は逆に、絶望が拡がって、若い人たちが何にも希望が持てなくなってしまう時に、初めて祈りはじめるんじゃないかと、そういう若い人が出て来るんじゃないかと期待しております。ごくごく少数になるけれど。何もなくなってしまうと、絶望のどん底に落ちた時初めて、祈ることを見たり、体験したり、生き物たちとの連帯感を感じたりするんじゃないでしょうか。」私たちは絶望を嫌い、希望に向かおうとする。その希望とは裕福になって、欲しい物を買えることである。近代化は、その希望を、ある意味では適えてくれたが、失ったものは計り知れない。経済を優先し、自然を踏みこみによって起こした公害によって、人間は痛み続けた。福島原発事故、今回の新型コロナウイルスの蔓延も同じ延長線上にあるのではないか。石牟礼氏は、コンクリートで固めた都市を嫌い、諸々の生き物と言葉を交わし合った自然への渴望は深い。彼女は、自我を主張することを求めている。この世とあの世が結び、交流する。人間と生き物が互いの命をいとおしみ、支え合う。そういう祈りの「共同体」を求めている。

緒方正人氏は、水俣病で父親を失い、自身も水俣病になり、激しい水俣闘争をした活動家である。その闘いの中で、「人を変えようと思っただけはいかん、人は変わってくれない、まずは自分がなにか一つ踏み越えてみせなければいけない」と考え、「俺は立場を変えればチツソと同じやったかもしれん。従ってチツソも救われんことには、患者も救われん」と、言い切った。そこで「チツソは私であった」と宣言し、水俣闘争から身を引いた。彼は、チツソの罪を自分の中に見たのである。水俣病の語り部であった杉本栄子氏も「昼も夜も祈らば、生きておれんとばい。人間の罪、わが身の罪に対して祈るとばい」と言って、この世を後にした。二人とも、一族から多くの患者を出している。石牟礼氏は、「人間はありえないような過酷な運命の中で、かくまで気高くなれるものかと思う」と述懐している。水俣公害は耐えがたい悲惨を生み出したが、絶望が人間の崇高さを生み出してもいる。